

# 石巻市における震災伝承・震災遺構に関する3つの検討会議の事例分析：会議手法に対する有効性の検証と配慮すべき点

---

佐藤 翔輔<sup>1</sup>・今村 文彦<sup>1</sup>

---

## Case Study of the Dialogue Processes on Three Planning Committees Related to Disaster Tradition and Remains Ground Plans in Ishinomaki City: The Verification of Effectiveness of the Committee Design and Practical Considerations

Shosuke SATO<sup>1</sup> and Fumihiko IMAMURA<sup>1</sup>

### Abstract

In this paper, we have conducted participant observation and, analyzed participant utterances on three planning committees for disaster tradition policy and remains establishment in Ishinomaki City, Miyagi Prefecture. The results are summarized as follows. 1) All of three committees continued main issues during five times meetings. The issues are “basic principle”, “tradition contents” and “intermediary organization” in disaster tradition ground planning committee, “range of preservation” and “use of surrounding facilities” in disaster remain planning committee for Kadonowaki elementary school building, “location of cenotaphs and monuments” and “maintenance and security before inauguration” in disaster remain planning committee for Okawa elementary school building. 2) Almost of Kadonowaki committee participants who requested dismantle the school building have changed their mind to preservation remain after visiting relevant buildings in the city and actual remains in other past affected areas and discussion. 3) Almost of three committee members have given positive evaluation to planning process and plans based committee because of dialogue system which emphasize opinion and idea generation from all participants.

キーワード：災害伝承（震災伝承）、災害遺構（震災遺構）、市民参画、コンフリクト、対話

Key words: disaster tradition, disaster remain, public participation, conflict, dialogue

---

<sup>1</sup> 東北大学災害科学国際研究所  
International Research Institute of Disaster Science,  
Tohoku University

## 1. はじめに

宮城県石巻市は東日本大震災で最大の被害を受けた被災地であり、震災伝承を意図する事業や計画が特に多いのが特徴的である<sup>1,2)</sup>。市は市内5箇所に「復興まちづくり情報交流館」を設置し、「石巻市南浜地区復興祈念公園」「震災遺構(旧門脇小学校校舎, 大川小学校旧校舎)」を構想中である(2018年4月現在)。民間セクターでは、住民が「がんばろう!石巻の会(集いの場)」, 未来サポート石巻(NPO)が「つなぐ館」「南浜つなぐ館」, 石巻日日新聞社(地元新聞社)が「ニューゼ」等を設置しているほか、石巻観光協会や大川小学校の遺族からなる「大川伝承の会」などが語り部活動を展開している<sup>3)</sup>。一方で、東日本大震災から4-5年経過した段階では、このような施設や活動への利用者数に変化が見られている。たとえば、石巻観光協会の「学びの案内」利用者は、平成26年度から平成27年度にかけて27,240人から20,921人と約7千人減少している<sup>1,2)</sup>。

東日本大震災の最大の被災地となってしまったこと、さらには以上のような震災伝承に関する施設や活動の利用状況が下降傾向になっていることを受けてか、石巻市では「震災による深い傷跡、悲しみの記憶及び震災を通じて得た教訓を風化させることなく後世に伝えるため、震災伝承に向けた市の基本方針(『石巻市震災復興基本計画』等)をもとに、『震災伝承計画』を策定する」<sup>4)</sup>こととなった(2016年7月)。これに関連して、石巻市として、旧門脇小学校校舎を部分保存、大川小学校旧校舎を全体保存(正確には、存置)することとし、両建物について「震災遺構整備計画」を策定することとなった(2016年7月)<sup>5,6)</sup>。その策定にあたって、石巻市は幅広い意見を収集、反映させるために、有識者、地域住民、NPO、行政によって構成される「震災伝承検討会議」「震災遺構検討会議(旧門脇小学校校舎)」「震災遺構検討会議(大川小学校旧校舎)」といった3つの検討会議を2016年7月に設置した<sup>4-6)</sup>。

災害伝承の事業に関する意思決定や議論に着目した研究においては、災害遺構が保存公開されるまでの経緯をレビューするものが多い。高橋ら<sup>7)</sup>

は、普賢岳の火砕流で被災した大野木場小学校被災校舎を、筑波・澤田<sup>8)</sup>は2004年新潟県中越地震で被災した妙見崩落現場を対象に災害遺構として整備されたプロセスを整理している。東日本大震災においては、佐藤・今村<sup>9)</sup>や安部・安武<sup>10)</sup>が、新聞記事データベースを用いて調査時点における保存・解体の動向や傾向を整理している。

本稿では、先に挙げた石巻市における震災伝承や震災遺構に関する3つの検討会議に着目して、そこで出された意見を分析・考察することで、そこに見られる知見を導出することを目的とする。以上に挙げた関連研究は、災害遺構の保存に至るまでのプロセスについて、事態の推移を巨視的に記述、言い換えれば節目節目で「決定したこと」を列挙している。それに対して本研究では、検討会議で出された個別の意見や状況を分析し、検討会議の内容そのもの、言い換えれば「決定するまでの過程」に着目して検討プロセスを考察する点において上記関連研究とアプローチが異なる。後述するように、東日本大震災の経験を契機にした石巻市における震災伝承と震災遺構に関する計画の策定は、他の被災自治体には見られない特徴がある。石巻市におけるこれら計画の策定プロセスを体系的・分析的に記述することは、他の東日本大震災の被災地や今後発生する災害の被災地において、同様のプロセスを踏む地方公共団体にとって有用な知見を提供するものと考えられる。本研究では、前述の先行研究等では明らかにされていない、震災伝承・震災遺構に関する検討会議とその方法の有効性や、検討会議において配慮すべき点を明らかにすることを目標とする。

特に本研究では、以下の4点について分析・考察することにする。以下の分析をふまえて得られる知見を、震災伝承や震災遺構に関する検討会議を今後、別な地域等で実施する上での仮説として、導出・提案するねらいがある。

- 1) 出された意見の内容
- 2) 遺構の保存・解体等に対する考え方の変化
- 3) 会議メンバーによる検討会議に対する評価
- 4) 検討会議の実践を踏まえての会議方式の変化

1) は、本研究において最も基本的な分析とな

る。主要な意見(論点)や特徴を明らかにすることで、今後、類似する計画立案において参考となるべき情報を提供する。2)は、門脇小検討会議のプロセスを対象に分析を行う。後述するように、石巻市では門脇小学校舎を部分保存して、震災遺構として整備する方針を出したが、門脇小周辺は可住地であることから、「思い出したくない」「見たくない」住民の解体・移設を望む声が当時は多かった。検討会議を経て、保存への意向が高まったことから、その考え方の変遷をたどり、考え方の変化に影響した要因を考察する。3)と4)は、これらの検討会議の実践を踏まえて、参加したメンバーにとっての評価や修正された会議の方式を示すことで、今後、類似する震災伝承関係の意思決定プロセスに向けて、同会議手法の有用性・援用可能性について提言する。

## 2. 3つの検討会議

本章では分析に先立ち、研究対象である石巻市で実施された震災伝承・震災遺構に関する3つの検討会議の経緯、開催概要、会議を踏まえて策定

された計画について概観する

### 2.1 検討会議設置までの経緯

表1に、2016年7月時点における石巻市の震災伝承および震災遺構に関する動きの概要<sup>11)</sup>を示した。表1に示した過程は、主に次のようにまとめられる。

- 1) 震災伝承全般においては、震災が発生した2011年(平成23年)12月に、石巻市震災復興基本計画が策定され、「重点プロジェクト」において、「未来への伝承プロジェクト」として、公園整備、アーカイブ公開、被災建築物の保存などが掲げられた。その後、国が設置する石巻市南浜地区復興記念公園の基本構想や基本計画の策定、市内5箇所の復興まちづくり交流館(中央館、牡鹿館、北上館、河北館、雄勝館)の開設、被災地域記録デジタル化事業などが行われている。
- 2) 旧門脇小学校校舎は、2013年(平成25年)に、新門脇地区復興街づくり協議会から、市に「解体」が要望された。これは、門脇地区におい

表1 石巻市における震災伝承および震災遺構に関する動きの概要(2016年7月時点、文献11)をもとに作成)

年度	震災伝承に関する動き	震災遺構に関する動き
2011	震災復興基本計画の策定 重点プロジェクトとして「未来への伝承プロジェクト」を位置付け	
2012	災害記録映像の制作(DVD)	保存・解体等に関する意向アンケートの実施
2013	復興記念公園基本構想の策定 震災復興記録写真展の実施	旧門脇小学校校舎解体についての要望書提出(新門脇地区復興街づくり協議会※) 保存・解体等に関する意向アンケートの実施 震災伝承検討委員会(3回)
2014	復興まちづくり情報交流館(中央館)の開設	新門脇地区復興街づくり協議会と震災伝承検討委員会との意見交換 震災伝承検討委員会(3回) 旧門脇小学校校舎の保存・活用についての提言
2015	復興記念公園基本計画の策定 復興まちづくり情報交流館(牡鹿館、北上館、河北館)の開設 復興記念公園の基本設計 県被災地地域記録デジタル事業の実施	新門脇地区復興街づくり協議会との意見交換(2回) 大川小学校旧校舎保存についての要望書提出(大川地区復興協議会)※ 大川地区復興協議会との意見交換(1回) 保存・解体等に関する意向アンケートの実施 在籍児童の意見募集 公聴会の実施 震災遺構調整会議(5回) 震災遺構化に関する検討・調整結果報告書を市長に提出 市長記者会見(保存の方針を表明)
2016	復興まちづくり情報交流館(雄勝館)の開設 復興記念公園の基本設計実施設計	保存に関する説明会の開催(大川地区) 保存に関する説明会の開催(新門脇地区)
2017	震災伝承検討会議の開催	震災遺構検討会議の開催

伝承施設の開設  
市民・民間団体等による様々な震災伝承活動の実施

例：市民・民間団体等による遺構の保存・活用  
旧東北実業銀行石巻支店、本間家土蔵

て災害危険区域の指定を受けないエリアが存在し、周辺に戸建住宅や災害公営住宅が立地し、周辺住民から「震災を思い出す」という景観上の理由等から、解体（排除）を要望されたものである。その後、同協議会と市の意見交換が幾度も開催されたほか、震災伝承検討委員会（本稿で分析対象となる震災伝承検討会議とは異なる）では、改めて旧門脇小の保存の必要性が提示されるなど、同校舎の保存・解体を巡って長い議論が続いていた。

- 3) 大川小学校旧校舎は、2015年（平成27年）に大川地区復興協議会から、市に「保存」が要望された。
- 4) 2015年（平成27年）6月には、石巻市震災遺構調整会議（本稿で分析対象となる震災遺構検討会議とは異なる）が設置され、同年12月までに5回の会議を経て、旧門脇小学校校舎は部分保存、大川小学校旧校舎は全体保存とすることの必要性が示されたのちに、2016年（平成28年）3月に石巻市長から、同方針を改めて市方針として述べる記者会見がなされた。

石巻市震災伝承検討委員会<sup>12)</sup>は、市内の震災伝承の各種施策を検討するために、専門家を含む委員によって組織された委員会である。同委員会は2013年10月に発足し、2014年12月に市長宛てに提言を出している。石巻市震災遺構調整会議<sup>13)</sup>は、以上の石巻市震災伝承検討委員会からの提言や大川地区復興協議会からの要望等を受けて、旧門脇小学校及び旧大川小学校を震災遺構として保存した場合の課題整理や整備費用、維持管理経費等の検討・調整を行うために、市職員を構成員とする庁内に設置された会議である。同会議は、2015年6月に発足し、同年12月に市長宛ての報告をまとめている。前者の委員会の提言書は、主に震災遺構と震災記録に関する事項が内容となっており、後者の調整会議の発足に影響している。本稿で分析を行う検討会議のうち、震災遺構検討会議は、震災遺構の残し方や利活用について幅広い意見を反映させることを目的に、有識者、地域住民、NPO、行政関係者によって構成された会議であ

る。また、震災伝承検討会議は、震災遺構だけでなく、震災記録や各種の活動を含めて石巻市の震災伝承に関わる基本的な方針や活動内容について、幅広い立場から意見を求めるために設置されている。

## 2.2 検討会議の位置づけ・構成・進め方

3つの検討会議は、同時並行で開催され（開催日・時刻は異なる）、必要に応じて相互の情報が交換されることになっていた。震災伝承検討会議は、語り部・ガイド・展示等の活動を行う市民・団体13名、学識者3名、市職員15名の計31名から構成された。震災遺構検討会議（旧門脇小学校校舎）は、新門脇地区復興街づくり協議会9名、語り部・ガイド・展示等の活動を行う市民・団体6名、遺族団体1名、学識者2名、市職員12名の計30名から構成された。震災遺構検討会議（大川小学校旧校舎）は、大川地区復興協議会6名、大川小学校遺族会6名、語り部・ガイド・展示等を行う団体7名、学識者1名、市職員12名の計32名から構成された。なお、各検討会議のメンバーは、他の検討会議へのオブザーバー参加が認められている。このうち、語り部・ガイド・展示等を行う団体から2名、学識者1名（筆頭筆者）は、すべての検討会議のメンバーになっている。通常、行政が主催する検討会・検討委員会は「委嘱」がなされ、「〇〇委員」と位置づけられることが多いが、本検討会議は後述するように、決定機関ではなく、市民相互の自由な議論の場として設置されたことから、参加者は「会議メンバー」と称された。

図1に、石巻市における「検討会議」と「計画」の関係<sup>4)</sup>を「震災伝承検討会議と震災伝承計画」を例にして示す。検討会議は、震災伝承や震災遺構に関する意向や意見を広く収集する場であり、それを集約して事務局である同市復興政策部が気づかり、得られた意見をもとに、市長や庁内関係者によって計画案が示されていくフィードバックの方式となっている。すなわち、検討会議では検討会議としての方針や詳細なとりまとめを行う機能は有しておらず、あくまで意見の収集・集約を目的としている。様々な考え方、アイデアがあ

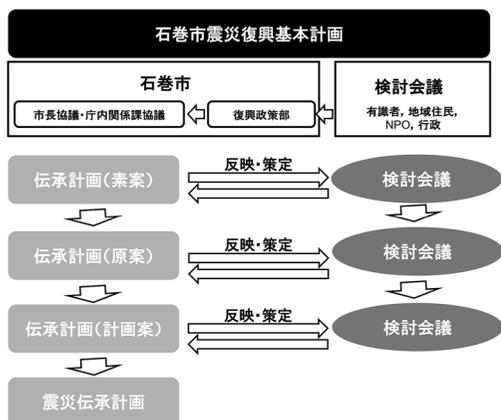


図1 石巻市における「検討会議」と「計画」の関係(文献4)をもとに作成, 例: 震災伝承検討会議と震災伝承計画

るなかで、もともと1つの意見に決定することは困難であることは自明である。そこで決定することよりも、多くの意見・アイデアを集める、ブレインストーミングを主体する会合とされた。意見を出しやすくするために、アジェンダを用意することも想定していたが、実際に検討会議を実施した際に、アジェンダがない状態でも活発に意見出しが行われた。このような設計は、事前に市が計画・提案したものである。

決定・決議を行う機能はないことから、検討会議において「座長」を置かないこととし、進行役を「ファシリテーター」として設置している。特に、門脇小検討会議では校舎の保存・解体について大きく意見が別れていたことや、大川小検討会議において、大川小津波訴訟により遺族と市が裁判中であったこともあり、会議メンバー内にコンフリクト関係があったため、中立的な立場の役割を要した。メンバーの互選・合意のもと、3つの検討会議のいずれにも参加し、第3者として立場を有する筆頭著者がファシリテーターをつとめた。なお、検討会議の設計においては倉坂<sup>14)</sup>による「望ましい合意形成プロセスの要件」<sup>(1)</sup>を、ファシリテーション・進行においては桑子<sup>15)</sup>による「社会的合意形成の進行」<sup>(2)</sup>に概ね準拠された。会議メンバーの発言は、記録係が付箋に速記し、その場で掲示・可視化する形式がとられた。これらは、

著者がファシリテーターをつとめることが決定した段階で、著者がファシリテーションの方針として設計・採用したものである。

第1～5回の検討会議が、2016年7月、9月、11月、2017年1月、3月と2ヶ月おきに開催された(表2)。第1回と第2回の間には、整備計画の検討対象である旧門脇小学校校舎と大川小学校旧校舎のほか、1995年阪神・淡路大震災の被災地として兵庫県(主に、人と防災未来センター、神戸港震災メモリアルパーク)、2004年新潟県中越地震で被災した新潟県(中越メモリアル回廊: きおくみらい、そなえ館、おらたる、妙見メモリアルパーク、木籠メモリアルパーク)、広島県(広島平和記念資料館、広島平和記念公園、国立原爆死没者追悼平和記念館、爆心地直下、袋町小学校、アンデルセン、旧日本銀行広島支店、被曝柳、旧陸軍被服支廠、日本赤十字・原爆病院)を視察している。これらの視察は、会議メンバーが独自に行うのではなく、それぞれの箇所で語り部やガイドを実施している個人や団体に依頼し、その直後に意見交換も実施した。なお、検討会議設置当初は、第1～5回にかけて、素案、原案、計画案が市から提示されていく予定であったが(図1)、実際には第3回にたたき台、第4回に事務局案、第5回に案が示された(表2)。検討会議の様子を写真1に示す。

### 2.3 検討会議における主な結果

本節では、各検討会議を踏まえて策定された3つの計画の主な内容・結果について述べる<sup>(3)</sup>。計画の詳細は参考文献<sup>16-18)</sup>を参照されたい。

震災伝承計画<sup>16)</sup>には、次のような基本理念が定められた。「東日本大震災の最大の被災地である石巻市は、かけがえのない大切な命を守るため、震災の事実と教訓、復旧・復興への思いを、世代を超えて、地域を越えて、すべての人々へ伝え続けます」。さらに、震災伝承計画においては、1) 市内に震災伝承事業を専門的に所掌する「震災伝承推進室」を設置すること、2) 震災伝承事業を担う官民産学連携の中間支援組織を設置することが挙げられた(図2)。前者は、同計画の策定を

表2 石巻市における震災伝承検討会議と震災遺構検討会議の開催履歴（主な内容）

	震災伝承検討会議	震災遺構（旧門脇小学校校舎）検討会議	震災遺構（大川小学校旧校舎）検討会議
第1回 2016年7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>「震災伝承検討会議」の役割・スケジュールに合意する</li> <li>「石巻市震災伝承計画」の枠組み(案)を確認する</li> <li>震災伝承の現況と課題を共有する</li> <li>震災伝承等に関する意見・意向を出す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「震災遺構検討会議」の役割・スケジュールに合意する</li> <li>「震災遺構整備計画」の枠組み(案)を確認する</li> <li>旧門脇小学校校舎の現況と震災遺構整備等に関する各種情報を共有する</li> <li>震災遺構整備等に関する意見・意向を出す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「震災遺構検討会議」の役割・スケジュールに合意する</li> <li>「震災遺構整備計画」の枠組み(案)を確認する</li> <li>大川小学校旧校舎の現況と震災遺構整備等に関する各種情報を共有する</li> <li>震災遺構整備等に関する意見・意向を出す</li> </ul>
視察 2016年8-9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>門脇小, 大川小</li> <li>新潟県(新潟県中越地震)</li> <li>兵庫県(阪神・淡路大震災)</li> <li>広島県(原爆)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>門脇小, 大川小</li> <li>兵庫県(阪神・淡路大震災)</li> <li>広島県(原爆)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>門脇小, 大川小</li> <li>新潟県(新潟県中越地震)</li> </ul>
第2回 2016年9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>第1回検討会議を振り返る</li> <li>現地視察報告を確認・共有する</li> <li>石巻市における震災伝承への取り組みを共有する</li> <li>今後の進め方とスケジュールを確認・共有する</li> <li>今後の震災伝承等に関して協議する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>第1回「震災遺構検討会議(旧門脇小学校校舎)」を振り返る</li> <li>現地視察結果を確認・共有する</li> <li>旧門脇小学校校舎の現況と震災遺構整備等に関する情報を共有する</li> <li>会議の進め方とスケジュールを確認・共有する</li> <li>震災遺構(旧門脇小学校校舎)整備等に関して協議する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>第1回「震災遺構検討会議(大川小学校旧校舎)」を振り返る</li> <li>現地視察結果を確認・共有する</li> <li>大川小学校旧校舎の現況と震災遺構整備等に関する情報を共有する</li> <li>会議の進め方とスケジュールを確認・共有する</li> <li>震災遺構(大川小学校旧校舎)整備等に関して協議する</li> </ul>
第3回 2016年11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまでの「震災伝承検討会議」を振り返る</li> <li>今後の震災伝承等に関して協議する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまでの「震災遺構検討会議(旧門脇小学校校舎)」を振り返る</li> <li>震災遺構(旧門脇小学校校舎)の整備に関して協議する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまでの「震災遺構検討会議(大川小学校旧校舎)」を振り返る</li> <li>震災遺構(大川小学校旧校舎)の整備等に関して協議する</li> </ul>
第4回 2017年1月	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまでの「震災伝承検討会議」を振り返る</li> <li>今後の震災伝承等に関して協議する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまでの「震災遺構検討会議(旧門脇小学校校舎)」を振り返る</li> <li>震災遺構(旧門脇小学校校舎)の整備に関して協議する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまでの「震災遺構検討会議(大川小学校旧校舎)」を振り返る</li> <li>震災遺構(大川小学校旧校舎)の整備等に関して協議する</li> </ul>
第5回 2017年3月	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまでの「震災伝承検討会議」を振り返る</li> <li>今後の震災伝承等に関して協議する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまでの「震災遺構検討会議(旧門脇小学校校舎)」を振り返る</li> <li>震災遺構(旧門脇小学校校舎)の整備に関して協議する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまでの「震災遺構検討会議(大川小学校旧校舎)」を振り返る</li> <li>震災遺構(大川小学校旧校舎)の整備等に関して協議する</li> </ul>
住民説明会 2017年5月		<ul style="list-style-type: none"> <li>旧門脇小学校校舎の震災遺構整備方針に関する説明会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大川小学校旧校舎の震災遺構整備方針に関する説明会</li> </ul>
説明会 2017年7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>最終結果の報告</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>最終結果の報告</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>最終結果の報告</li> </ul>



写真1 検討会議の様子(例:震災伝承検討会議)

前に2017年4月に実現している<sup>19)</sup>。後者は、同計画の実現のためには、震災伝承活動を継続的に支える安定的な仕組みと、この取組みを発展させる上では、行政組織ではなく、柔軟で専門性を持った組織が必要であることから、国や宮城県、学術研究機関の他、これまで震災伝承に関わってきた個人や団体等の幅広い活動主体が、震災伝承の重要性と担い手としての決意を共有し、それぞれの役割を全うしながら、永続的に震災伝承できるよう、官民産学連携の中間支援組織設置と連携の体制を構築することとしたものである(図2)。中間支援組織を中心とする推進体制のイメージは、



図2 石巻市震災伝承計画：震災伝承事業を担う官民産学連携の中間支援組織と推進体制のイメージ（文献16）をもとに作成

新潟県中越地震の被災地で設立された中越防災安全推進機構および4拠点・3メモリアルパーク(きおくいらい, そなえ館, きずな館, おらたる, 妙見メモリアルパーク, 震央メモリアルパーク, 木籠メモリアルパーク)に着想を得ている<sup>20)</sup>, これは, 2016年8月に実施した検討会議メンバーによる中越地方への視察が大きく影響している。

旧門脇小学校校舎・震災遺構整備計画においては, 1) 石巻市南浜地区復興祈念公園との一体型で整備すること(図3), 2) 校舎のみならず, 学校敷地内にある既存施設を活用すること(図3), 3) 校舎中央部分を部分保存すること(図4), 4) 内部立ち入り不可にすることなどが挙げられた。1)は, 旧門脇小学校の前には, 国が宮城県内に一つ設置する復興祈念公園(石巻市南浜地区復興

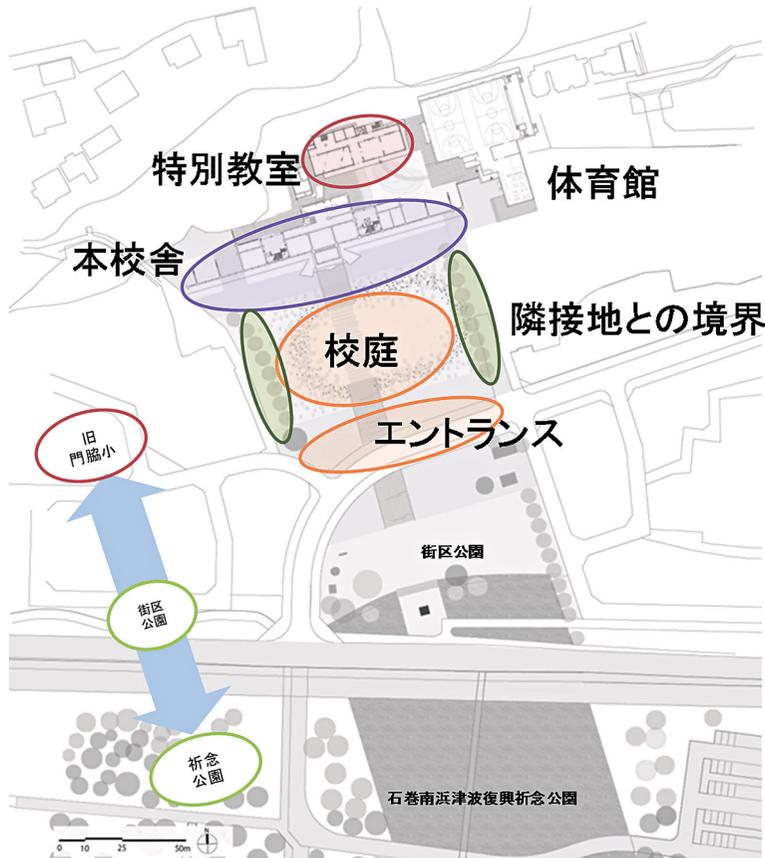


図3 門脇小学校校舎・震災遺構整備計画：建物周辺との関係性

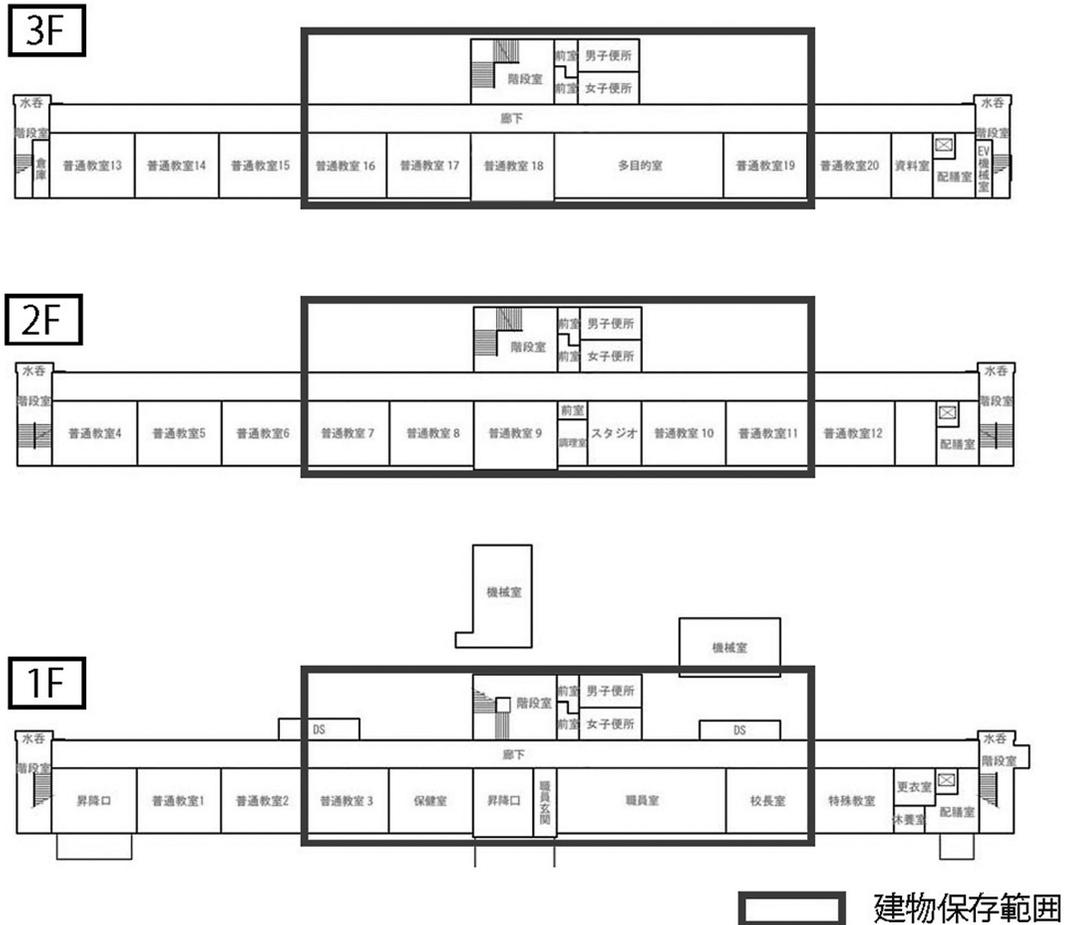


図4 門脇小学校校舎・震災遺構整備計画：建物の保存範囲

祈念公園)が位置することを受けて、多くの人が来訪することが予想されることから、旧門脇小学校震災遺構は同公園と一体的に整備するものである。2)は、特別教室や体育館などの周辺構造物が、その形を有していることから、コミュニティ、展示や学習の機能をもつ施設にリノベーションしようとするものである。3)は、保存・解体を巡る議論に関連するものであり、周辺が可住地であることから、景観に配慮して、震災遺構として防災教育上で最小限必要な部分として、1-3階の中央部分を整備対象とする方針に着地した。4)は、同校舎が津波火災の痕跡や津波堆積物が、震災発生当時ほぼそのまま残っている数少ない建物であ

ることから、その状態をなるべく維持させるために出された方針である。内部に立ち入れない分、外部から内部を観察できる仕組みを整備する必要がある。

大川小学校旧校舎・震災遺構整備計画においては、1)慰霊・鎮魂と防災教育のエリアに分かつこと(図5)、2)校舎を存置しつつ、なるべく当時のままに残すこと、3)内部への立ち入りはガイド同伴という条件で行うこと、4)管理棟を整備することなどが挙げられた(図5)。1)は、大川小学校で多くの犠牲者が発生したことを受けてエリア西側を慰霊・鎮魂のゾーンに、校舎施設や周辺が津波の流況や当時の避難行動を物語ってい



図5 大川小学校旧校舎・震災遺構整備計画：建物周辺の全体イメージ

ることを受けてエリア東側を防災教育のゾーンとするものである。2)は、震災発生前や当時の状態を再現もしくはそのまま残すことを、児童を亡くされた遺族から強く出された要望である。3)は、①建物に安全に立ち入ってもらうためと、②多くの犠牲者が出たことから自由に立ち入るという趣旨の建物ではないこと、③丁寧な学習機会を提供するために出された方針である。4)は、3)のガイドが配置されることを受けて、また建物の維持・管理の担い手が常駐することを意図して提案されたものである。

### 3. 研究方法

#### 3.1 研究アプローチ

研究方法は、1)すべての検討会議での参与観察と、2)検討会議で出された意見の内容分析から構成される。1)の参与観察は、前述したように、筆頭著者がすべての検討会議にファシリテーターとして採用されたことから実現した。この参与観察は、検討会議で配布される資料を収集するとともに、各メンバーの発言のトランスクリプション(後述)のテキストだけでは分からない、発言者の表情や場の空気感といった発言のニュアンスや行間、会議中の変化を読み取ることが主な目的である。2)は、すべての検討会議の録音データのテープ起こしを行い、トランスクリプションを作成することで行う。なお、トランスクリプションは、ID、会議名1(震災伝承検討会議、門脇小検

討会議、大川小検討会議)、会議名2。(第1～5回、説明会)、話者、発言内容のフィールドからなるデータベースに整理した。1つの発言は、次の話者が話すまでとし、これを単位レコード(1行)とした。このうち、市やファシリテーターからの説明、あいさつ、「はい」「うん」など、直接的に内容を含まないレコードを除いたものを対象にして分析を行った。

#### 3.2 分析方法

以下に、1章で挙げた本研究で明らかにする点を再掲する、

- 1) 出された意見の内容
- 2) 遺構の保存・解体等に対する考え方の変化
- 3) 会議メンバーによる検討会議に対する評価
- 4) 検討会議の実践を踏まえての会議方式の変化

これらを明らかにする上では、それぞれに使用するデータと分析方法が異なる。以上の1)～3)は主にトランスクリプション(データベース)の内容分析を行うことで、以上の4)は主に参与観察の結果を用いて分析を行う。

1)を分析する方法は次の通りである。①それぞれの検討会議の第1～5回の発言をカード化する。②発言の内容を読み込み、内容(意味)の同一性・類似性にもとづいて構造化(グルーピング)を行う。③各グループに内容ラベルを付ける(ラベリング)。②③は、複数の評価者によって行った。②の作業では、評価者AとBの2名が、③の作業は評価者Cを加えて計3名で行い、最終的な内容ラベルとして採用した。評価者AとCは、研究機関テクニカルスタッフでそれぞれ40代・文系大学出身、30代理工系大学院出身である。評価者Bは筆頭著者で災害研究に従事する者である。このラベリング結果をデータベースに戻して、集計を行うことで意見内容の量的な傾向を把握する。複数の発言をグループ分けしようとする作業は、各発言の意味や微妙なニュアンスが異なるために、完全に相互排他的な分類することは実質不可能であり、本分析方法には限界がある。そこで本研究では、以上のように、分析作業の中で、複数の評価者が相互チェックや合意形成のステップ

を経ることで、分析の妥当性・信頼性を高める工夫を行っている。

2) を分析する方法は次の通りである。門脇小検討会議の第1～5回のトランスクリプション(発言)のうち、門脇小学校校舎の保存・解体等に対する考え方を述べている発言のみを分析対象にする。これを、話者と会議(計5回)のマトリックスに整理した上で、その発言内容を読み込み、「解体」「全体保存」「部分保存」「移設」というラベルに変換する。この分析手続きは、以上の評価者3名で協議しながら行った。

3) を分析する方法は次の通りである。それぞれの説明会(2017年7月、最終結果の報告)において、ファシリテーターから会議メンバーに対して、検討会議の感想・ふりかえりの発言を求めている。これを会議メンバーごとに抽出し、その発言内容から、検討会議全体や最終的な計画について好意的であるか、否定的であるか、いずれでもないかを評価する。この分析手続きは、以上の評価者A、B、Cで行った。

4) は、著者が行った参与観察から、検討会議の実践を通して、変化した会議方式を列挙するとともに、変化の原因についても述べる。

## 4. 結果

### 4.1 出された意見の内容

前章1)の分析を行った結果を表3～表5の示す。表3～表5では、縦方向に内容ラベル、横方向に会議(第1～5回)のマトリックスにして、セル内に、その内容ラベルに関する発言の回数を示している。傾向を読み取りやすくするために、内容ラベルよりも、1階層上位に「区分」という括りを設けて整理して示している。また、第1～5回のそれぞれ、同一会議で上位3位であり、発言の回数が10件以上となったセルをグレーでハイライトしている。右から2列目の「計」欄においても、上位3位のセルにハイライトしている。

#### (1) 震災伝承検討会議の意見

震災伝承検討会議の意見は、伝承の内容・方法(157件)、震災伝承に対する考え方(136件)、市内外の連携(55件)、持続可能性の確保(47件)、震災学習の整備(31件)、検討会議そのものに関する確認(23件)の6区分、計15種類の内容となった(表3)。このうち、以下に上位3位となり、かつ発言の回数が10件以上となった内容ラベル(ハイライトされたセルが該当する内容ラベル)について詳細を述べる。以下のかぎっこは、該当する具体的な発言の例である。

1) 伝承の内容：第3回、第4回で多く、全体を

表3 石巻市震災伝承検討会議における意見の内容分析の結果

区分	内容ラベル	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	計	区分計
伝承の内容・方法	伝承の内容	9	3	26	11	9	58	157
	伝承の手段	9	5	7	9	5	35	
	震災前の伝承の課題		1			28	29	
	伝承の対象		4	19	1	2	26	
	対応の検証の必要性			9			9	
震災伝承に対する考え方	基本理念	6	6	23	27	71	133	136
	基本計画の位置付け					3	3	
市内外の連携	地域間の連携ネットワーク化	8	3	2	1	7	21	55
	震災遺構のあり方	11	7	1		1	20	
	南浜祈念公園の位置付け	3	3			8	14	
持続可能性の確保	中間支援組織	1		17	18		36	47
	担い手、人材育成	2	3	1		5	11	
震災学習の整備	展示・学習施設の機能・運営	3	16				19	31
	資料や情報の収集・保存	5	7				12	
検討会議そのものに関する確認	会議自体の流れ・やり方に対する指摘	6	6	8	1	2	23	23
	計	63	64	113	68	141		449

通しても58件と2番目に多い意見である。石巻市の被害実態のみならず、震災発生前の歴史・地理や、震災発生後の復興プロセスを含める要望に関する意見などがあつた。

- ・「石巻地方特有の地形や地勢なども必要かなと思うのですね。ここ特有の津波の形態がありました。三陸海岸や河川を遡上する津波も、きちんと踏まえておく必要があるかなというのが一つですね。(伝承活動者)」
- ・「伝承する内容のところですが、【中略】まずは支援してもらったことの感謝の気持ちは絶対なければいけないと思います。もう一つ、夏に中越に視察に行ったときに、旧山古志村の元気な私たちの集落を見てくださいという取り組みもあつたので、そう

いったプラスの面のことも伝えるべきではないかと思います。(伝承活動者)」

- 2) 震災前の伝承の課題：第5回ではじめて出ていく内容である。東日本大震災が発生する前は、市民は津波災害の発生を注視していなかったという課題を計画本文上に明文化することを要望する意見があつた。
  - ・「(宮城沖地震が高い確率で) 来ると言われていて、あれだけの方が亡くなったということが、震災伝承の課題として明記する必要があると思います。(伝承活動者)」
  - ・「(震災発生前) 私は何回も防災訓練をしていましたが、大きな地震の後には津波が来るよという言葉はあまり使われていなくて、当時も後に来る津波ということは、あ

表4 震災遺構(旧門脇小学校校舎)整備検討会議における意見の内容分析の結果

区分	内容ラベル	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	計	区分計
保存・解体に関する意見	保存の範囲	9	4	11	12	34	70	104
	移設の可能性	3	24				27	
	可住地であるため周辺住民への配慮	1	2	2	1	1	7	
伝承の内容・方法	中に人を入れるか入らないか(中のモノに手を付けるかどうか)	3	4	2	8	18	35	97
	伝承内容：学校・地域の歴史		1	6	4	1	12	
	伝える方法、技術、ツールに関する意見	1	8	1	1	1	12	
	遺物の扱い		2	5	3		10	
	伝承内容：津波火災	4	1	1	2	2	10	
	写真、映像記録の活用	8					8	
	伝承内容：当日の避難行動(校舎裏)	1	1	3		1	6	
	伝承内容：津波の堆積物	1				1	2	
伝承内容：日和山幼稚園	1				1	2		
付帯施設の活用	特別教室、体育館、校庭の活用	1	8	21	31	26	87	87
遺構に対する考え方	遺構の目的・意義・意味	2	11	1	3	2	19	40
	南浜復興祈念公園との連動性	1	6	5	3	2	17	
	校舎に対する思い	3				1	4	
整備前の懸念事項	建物の耐震性		9	5	4	4	22	33
	オープン前の校舎の管理		4	4			8	
	建物の耐用期間					3	3	
追加整備する施設	駐車場の場所とキャパシティ			1	17	5	23	28
	観察棟			1	3	1	5	
公開開始後の運用・メンテナンス	運営組織、体制				3	2	5	9
	オープン後の維持管理			4			4	
検討会議そのものに関する確認	復興工事状況の質問・確認		17			5	22	53
	予算に関する質問	5	1	2		9	17	
	整備スケジュールの質問・確認		6			2	8	
	会議のやり方に対する意見	3	1	1		1	6	
	計	47	110	76	95	123		451

表5 震災遺構（大川小学校旧校舎）整備検討会議における意見の内容分析の結果

区分	内容ラベル	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	計	区分計
整備前の懸念事項	慰霊碑・モニュメントの場所	15	7	17	9	77	125	132
	用地買収		1	3	1		5	
	建物の耐震性					2	2	
公開開始前後の運用・メンテナンス	オープンまでのメンテナンス（防犯・ルール規制）	14		25	14	41	94	116
	運営組織				1	8	9	
	排水への懸念・対策		1	4	1	1	7	
	運用・収入・維持			1	1	4	6	
伝承の内容・方法	中に人を入れるか入れないか		2	1	15	13	31	62
	伝承内容：命を守る方法			7	5		12	
	伝承内容：避難の過程	2	1	6	1		10	
	伝承内容：津波の恐怖（河川遡上）			5	2		7	
	伝承内容：学校・地域の歴史	1		1			2	
来訪者の安全対策	来訪者の津波避難対策	1		5	1	36	43	52
	柵・バリケード			1		8	9	
遺構に対する考え方	遺構の目的・意義・意味	2	8	1	17	1	29	47
	保存の是非		5	3	7	3	18	
敷地の使い方	震災前にあった桜の再生	4		4		12	20	45
	起伏（高低差）				1	16	17	
	ゾーニング			5		3	8	
追加整備する施設	管理棟			1	16	2	19	22
	駐車場のキャパシティ					3	3	
被災した周辺施設の取り扱い	渡り廊下・プール・屋外ステージ・校門の保存				4	1	5	5
検討会議そのものに関する確認	この会議の位置付けに関する質問	15	2				17	112
	会議のやり方に対する意見	2	22	1		3	28	
	会議の記録の取り扱い（公表）		44				44	
	予算に関する質問	12			7		19	
	会議の公開・非公開		3			1	4	
	計	98	96	91	103	235		623

まり頭になく・・・。（伝承活動者）

3) 基本理念：第3回から第5回にかけて多く、全体を通して、133件と最も多い意見である。石巻市震災伝承計画を規定する最上位の箇所であることから、この部分に最も多くの意見が集中し、活発な意見出しがつついた。

・「これ（基本理念）の中でできるだけ簡単に子どもでも分かるように書きましょう。あまり多くない言葉の量でもう少し熱量が出るようにしないといけません。（伝承活動者）」

・「もう一歩踏み込んで『思いを伝え、そして、行動していきます』みたいなことが入れられないかなと思いました。思いを伝えるだけではなくて、例えば今後、津波の警報が

あったときでも、石巻市民一人一人がきちんと逃げて、やはり命を守る行動をできる人になっていくことが、すごく大事なのではないかなと思います。ですので、私たちは、モデルになるという意志を、ここに込められたらどうかなと思いました。（伝承活動者）」

4) 震災遺構のあり方：第1回の検討会議で多く出された意見である。いわゆる震災遺構として整備される門脇小学校や大川小学校以外にも、遺すべきものがある、という意見や、被災当時の場所・状態にして遺すべきという意見であった。

・「門脇小学校だけが大火の震災遺構ではないと思っています。というのは、山際に焼

けた大木が残っているのです。それから、砂山辺りは石垣が黒くなっているのです。そのようなものを保存するべきだと思っています。(伝承活動者)』

・「建物だけが被災するわけではなく広域で全体が被災をして焼け野原になるから、その記憶を伝えるためには、被災した建物がその場所にないと意味がない。(伝承活動者)』

5) 中間支援組織：第3回、第4回で多く、全体を通して36件と3番目に多い意見である。これは、石巻での震災伝承において、官民連携の中間支援組織の必要性を述べる意見であった。

・「中越に行ったときに、公益社団法人中越防災安全推進機構のお話を頂きましたね。同機構のような取り組みは石巻でも必要なのかなと私はずっと思っていました。(伝承活動者)』

・「一つ、そこの協力体制のような形で外部組織があっているのかなと思います。【中略】この震災伝承は、やはり一人一人の経験を伝えるというのがすごく語り部の中にはあるので、それを行政の方が主導でやっても、やはり全員が同じことでは多分同じ内容になってしまっている。それとは別に、私は一人一人のことを伝える部分を見られるのはどちらかというと民間やNPO的な力が強くて、でも核となる部分、震災の災害の規模やデータの部分は行政の方が強いのかな。その活用というのは、やはり行政の人は伝えることはすごく苦手とするので、そこはやはりNPO的なところが連携するのがすごく大事になってくるのかな。(伝承活動者)』

6) 展示・学習施設の機能・運営：第2回の検討会議で多く出された意見で、展示・学習施設のニーズを述べたものである。

・「家族連れで来て、あるいは子供だけ来ても(学べる)、いろいろな形があることが施設として大事なかなと思っています。(伝

承活動者)』

・「中越に行ったときに思ったのは、地域の人たちが交流の場として交流し、震災伝承をしているのです。そういうところが石巻の各地でも行われたいものだろうか。そういう目的から地域の人たちが自分たちのことを語れる場ができて、活性化にもなるのではないかと思います。(伝承活動者)』

## (2) 門脇小学校検討会議の意見

門脇小学校整備検討会議の意見は、保存・解体に関する意見(104件)、伝承の内容・方法(97件)、付帯施設の活用(87件)、遺構に対する考え方(40件)、整備前の懸念事項(33件)、追加整備する施設(28件)、公開会議後の運用・メンテナンス(9件)、検討会議そのものに関する確認(53件)の8区分、計27種類の内容となった(表4)。前述したように、門脇小校舎については住民から強く解体の要望が出されたことに関わらず、市からは保存の意向が示されたことから、保存・解体に関する意見が最も多くなった。以下では、各回や全体で上位3位となった内容ラベルについて詳細を述べる。なお、検討対象そのものに対する意見に着目するために、上位3位のハイライトについては、検討会議そのものに関する確認は除外している。

1) 保存の範囲：第3回から第5回で多く、全体を通して70件と2番目に多い意見である。市が部分保存を表明したことを受けて、その範囲に関する意見が多く出た。

・「市の方からも話があったように、形はどうであれ、遺構として残すことが、まず決まっている。その大きさをいっぺんに決めるべきだと思います。残せる部分で、どのくらい残すか。(住民)』

・「やはり私は個人的には最小限の大きさで保存はいいと。(住民)』

2) 移設の可能性：第2回の検討会議で多く出された意見である。解体を希望している住民が、部分保存の解釈として、移設(曳家)を希望する意見が出た。一方で、その実現可能性についての疑問や意見も活発となった。

- ・「私たちは解体をお願いしていましたが、移設する分についてはOKですよという話をずっと以前からしています。(住民)」
  - ・「実際、曳家とかというのは本当に現実離れしています。実際引く土地がない。引いていく場所がないですね。【中略】広島の小学校(袋原小学校)のように、辺りから見てもどこが小学校だか分からなくても、あれでもきちんとある意味残っているという。(住民)」
- 3) 中に人を入れるか入らないか(中のモノに手を付けるかどうか)：第3回から第5回で多く、全体では35件と3番目に多い意見である。震災遺構となる校舎について、内部への立ち入ること可能にするか否かの議論である。内部への立ち入りについては、視覚的なインパクトは高いものの、建築基準法を満たすためにコスト面で大きなハードルがあること、現存している校舎内の火災痕や津波堆積物に手を入れなければならないことが懸念事項となる。
- ・「やはり実物を見せたい。でも、中に入ると壊れてしまうというか、今の状態が壊れてしまうので、なるべく多くの部分を残して、外から見る形にしたいと思います。(伝承活動者)」
  - ・「中に入れないで、外から観察した方がいいのではないかと。(住民)」
- 4) 特別教室、体育館、校庭の活用：第3回から第5回の検討会議で多く、全部で87件と全体を通して最も多く出された意見である。校舎の付帯施設として、別棟としての特別教室、体育館、校庭について、その活用方法に関する意見が多く出された。
- ・「特別別教室、校庭、体育館などを地域の方たちの地域の活動の場として使っていただくような形にならないのだろうか。(伝承活動者)」
  - ・「体育館の利用ですが、これだけのスペースがあれば映像で皆さんに紹介できると思うのです。被災に遭った人は見たくないと思うのですが、よそから来る人には、われわれも神戸で映像を体験してきたのですが、この体育館をそのように活用できると思うのです。(住民)」
  - ・「遺構だけではなくて、遺構の資料館を併設すべきだと思うのです。(住民)」
- 5) 遺構の目的・意義・意味：第2回の検討会議で多く出された意見である。
- ・「門脇小学校は震災当時のまま残して、現実にあったことを伝えながら【中略】そこを本当に研修の場、教育の場、防災の情報を伝える場ということにしたいと思っています。(伝承活動者)」
  - ・「新門脇のまちづくりに生かしてほしいなと強く願っています。(伝承活動者)」
- 6) 駐車場の場所とキャパシティ：第4回の検討会議で多く出された意見で、駐車場のニーズを述べたものである。
- ・「駐車場をたくさん造ってもらいたいです。というのは、遠くから来る方は、もちろん車なのですが、地元の人たちが見学に来るのにも、今は車社会なので、みんな車で来るのです。(住民)」
  - ・「校舎を一部縮小にして、その分に花壇を置いて、ある程度駐車場スペースを。(住民)」
- (3) 大川小学校検討会議の意見**
- 大川小学校検討会議の意見は、整備前の懸念事項(132件)、公開開始前後の運用・メンテナンス(116件)、伝承の内容・方法(62件)、来訪者の安全対策(52件)、遺構に対する考え方(47件)、敷地の使い方(45件)、追加整備する施設(22件)、被災した周辺施設の取り扱い(5件)、検討会議そのものに関する確認(112件)の9区分、計27種類の内容となった(表5)。以下では、各回や全体で上位3位となった内容ラベルについて詳細を述べる。なお、検討対象そのものに対する意見に着目するために、上位3位のハイライトについては、検討会議そのものに関する確認は除外している。
- 1) 慰霊碑・モニュメントの場所：第1回、第3

回、第5回で多く、合計で125件と全体と通しても最も多く出た意見である。大川小敷地内には12個という、非常に多く遺族が設置した慰霊碑と外部から寄贈されたモニュメント等が存在する。これらは、建立の主体や背景などがすべて異なる。

・「(大川小には) あまりにも訪問する人が多くて、遺族としては慰霊碑に行くのがかなり遠慮しながら拜んでいる状態が続いているのです。【中略】慰霊碑の移転も他の場所という話も出ているのですが、この慰霊碑の移転の方を早めに進めてもらえないかなと。(住民)」

・「(慰霊碑は) 釜谷遺族会あるいは大川小学校遺族会などが整備をしたものです。【中略】釜谷の慰霊碑は釜谷の地区住民の中で、大川小慰霊碑は大川小遺族会で、それぞれ所有者が移動先を決めなくてはなりません。(住民)」

2) オープンまでのメンテナンス(防犯・ルール規制): 第1回、第3回、第5回で多く、全体と通して94件と2番目に多く出た意見である。現在もなお、多くの来訪者がある中で、清掃や防犯などの課題があり、これらを整備・オープン前にも継続する必要性を述べている。

・「(現在の校舎は) きれいな状態を保っていると思います。これは遺族による清掃、外に関すればボランティアの方々によって草取りをしてもらったり、ごみ拾いをしてもらったり、そのような形で今きれいな状態を保っているという形です。【中略】しかし、よくないところで、たばこの吸い殻が落ちているのですよね。これは大変よくないと思います。(住民)」

・「(現在、校舎をロープで囲っているが) 入ってほしくない所にまで入る方がいらっしやるようなので。この間もわざわざトラロープを外して、中に車ごと入れられた方がいたそうです。【中略】遺族の人たちが見たり、地元の人たちが見れば、注意もすることも

できるのだけど、いないときもあるわけなので、看板だけではなく、例えば夜はライトがつくようなことだったり、何かしらもう少し考えなければいけないと思っています。保存するとなつて、結局手を入れるまでの間というのがありますよね。ちょっとその間、何か対策(が必要)。(住民)」

3) 中に人を入れるか入れないか: 第4回で多く出された意見である。2階部分の4年生教室の床面が津波で盛り上がっている部分があり、津波の威力を学ぶ重要な箇所であることから、校舎内部を公開することには、会議メンバーの多くの賛同があったが、安全面やコスト面から、校舎外から内部を見れる状態にする方向に意見が収斂された。

・「私は校舎を全面公開した方がいいと思います。ある程度中身も見せないと、理解できないと思います。(住民)」

・「校舎の内部を見せるためには、内部をかなり整備しないと。(住民)」

・「管理者なり語り部さんなり誰かに付き添ってもらって、入る形を取っていただきたいと思います。(住民)」

4) 来訪者の津波避難対策: 第5回で多く出された意見である。来訪者は、現地の地理状況に詳しくないことから、地震・津波発生等の緊急時について避難促す工夫が必要であるという意見が出た。

・「何か災害があった場合にどこに避難するべきかという案内とか、そういう表示は必要かと思います。(住民)」

・「山に登ればいいやということも地元の人たちは分かると思います。ただ、県外から来る人たちがどのような形でその誘導で山に登ることができるか、掲示板等が必要とするなり必要だと思います。(住民・伝承活動者)」

5) 遺構の目的・意義・意味: 第4回で多く出された意見である。大川小学校では、児童の犠牲者が発生したことから、慰霊・鎮魂、防災教育の大きく2つの意味合いが出された。特

に、視察等を受けて過去の被災地との差異についての言及が見られた。

・「阪神・淡路大震災の被災地では、防災で取り組むことをどう考えていけばいいのですかと聞くと、やはり耐震補強や構造体として強い建物を作っていくというのが、命を守る防災だとも言っています。中越でも同じような語り部さんに聞いても、やはり建物を丈夫にすることが、そこでつぶされなくても命を守る取り組みだと言っています。それとこの大川小学校で起きた津波被害というのは、やはり認識、命を守る防災は意味が違うと思います。私はそう捉えました。(住民、伝承活動者)」

・「慰霊としての位置づけと、それから伝承・教育の場としての位置づけをちょっと分けた方がいいのではないかと思います。(伝承活動者)」

6) 管理棟：第4回で多く出された意見である。管理人が常駐するスペースとして、管理棟設置のアイデアが挙がり、その規模や機能に関する意見が出された。

・「その(管理棟)中で何かが入って雨をしのげたり、風をしのげたりする場所が旧校舎の中に取りれるのか、管理棟の中に作ってもらうか。そういった部分も考えてもらいたいと思っています。(住民・伝承活動者)」

・「(管理棟は)展示スペースを含めたトイレなどの部分だけで、学習棟などという部分は考えているのかどうか。そこにスペースがあるかどうか。防災学習でたくさんの人たちが確かに来ています。(住民・伝承活動者)」

#### (4) 各検討会議の特徴

表3～5をもとに、各検討会議で特徴的に出現していた意見について、詳述・考察する。

表3(震災伝承検討会議の意見)を見ると、伝承の内容・方法のうち「震災前の伝承の課題」が第5回で28件と急増している。これは、2016年11月福島県沖地震による津波<sup>21)</sup>と、その調査結果

の公表<sup>22)</sup>が影響していると考えられる。同地震は2016年11月22日に発生し、最大震度5弱、宮城県内では最大遡上高TP4.3mの津波を観測した<sup>23)</sup>。宮城県内では津波警報が発表され、石巻市内でも避難指示が発令された<sup>24)</sup>。石巻市本町エリアにおいて、東日本大震災において津波で1m以上の浸水があった地域を対象にした質問紙調査から、避難したのは41.2%と、住民の半分を下回る結果となったことが、第5回会議(2017年3月27日)の前である2017年3月6日に発表された<sup>25)</sup>。このことを受け、「この前の福島沖地震のときに、ではみんな避難したのか」というと、やはり避難していない人がたくさんいて、実際の行動につながるようなものを踏まえて見直さないといけない(伝承活動者)」という発言をきっかけにして、「うちの方は全然。私は何回も防災訓練をしていましたが、大きな地震の後には津波が来るよという言葉はあまり使われていなくて、宮城県沖地震、宮城県沖地震と言われてきたものですから、あのとき、『あ、これが宮城県沖地震だな』ということで、後に来る津波ということは、あまり頭に…。(住民・伝承活動者)」、「(宮城県沖地震が)99%来ると言われていて、あれだけの方が亡くなったということ自体が、震災伝承の課題として書かれていない。(中略)その過去の取り組みはこうで、それでもこれだけの方を亡くしてしまった。だから、震災伝承をやるのですという、本当はそういう作りの基本計画のはずなのに、なぜか3月11日から歴史が始まったかのような書き方はよくない。(伝承活動者)」のように、東日本大震災発生前には、宮城県沖地震の発生を懸念していたものの、津波については念頭になかったという、震災前をふりかえる発言が多く出た。現在取り組んでいる、またはこれから取り組もうとしている震災伝承には、東日本大震災発生以前からの課題・反省を踏まえなければならない、という「震災前の伝承の課題」意見が多く出された。

表3(震災伝承検討会議の意見)では、震災学習の準備のうち「展示・学習施設の機能・運営」が第2回で18件と多くなっている。これは、第2回(2016年9月28日)よりも前に実施された視察、

特に新潟県中越地震で被災した新潟県中越地方への視察(2016年8月28-29日)が大きく影響している。同視察では、前述したように中越メモリアル回廊のうち、きおくみらい、そなえ館、おらたる、妙見メモリアルパークなどを訪問している。中越視察において、震災のありのままを見せることの重要であること、家族で学び合える環境が作られていること、地元住民による運営や訪問書との交流が重要であること等を学び、それを「展示・学習施設の機能・運営」として意見されたものである。具体的な意見としては、「中越に行ってみて…(実感したことがある)。立派な記念館というのは記憶に残らないのです。崩落の現場(妙見メモリアルパーク)が印象に残りました。行っても何もないのです。パネルしかないですから。でもその現場に立ち会って、やはり思うのは、素朴さが大事なのではないかと思うのです。(住民・伝承活動者)」、「家族連れで来て、それに合うような、あるいは子供だけ来てそれに合うような、いろいろな形があると思うのですが、そういうものがそろっていることが施設として大事なと思っています。(住民・伝承活動者)」、「中越のときに思ったのは、地域の人たちが交流の場として交流し、震災伝承をしているのです。そういうところが石巻の各地でも行われぬものだろうか。そういう目的から地域の人たちが自分たちのことを語れる場ができて、活性化にもなるのではないかと思います。(住民・伝承活動者)」、「地域の方が中心となって運営していくことがすごく大事だと思います。新潟中越に視察に行った際、私の心に一番残ったのは、山古志村のおらたるで活動していた〇〇さんです。〇〇さんから、すごく地元が好きだという愛着が伝わってきたので、そういう愛着を持った人がこういう震災を伝えていけば、訪れた人の心が打たれるような伝承になるのではないかなと私は考えます。(住民・伝承活動者)」などが挙げられる。4章2節で後述するように、先進事例の視察が、このようなアイデア出しにおいて大きな影響をもつことが分かる。

表4(旧門脇小校舎の意見)では、第2回で「遺構の目的・意義・意味」という総論が11件と多く、

その後は「保存の範囲」や「特別教室、体育館、校庭の活用」といった各論が多くなる。それに対して、表5(大川小旧校舎の意見)では、第1~3回では「慰霊碑・モニュメントの場所」や「オープンまでのメンテナンス」といった各論が多いのに対して、第4回で「遺構の目的・意義・意味」という総論が17件と多くなり、旧門脇小校舎と大川小旧校舎の検討会議では、各論・総論の推移が反対になっているようにも見える。これは検討会議の開始段階における遺構保存に対する考え方(賛成・反対)が大きく影響しているようである。旧門脇小校舎に対して、1章で述べたように検討会議の開始時点においては解体・移設を望む住民が多く存在していた。一方で、大川小旧校舎に対しては、2章1節で述べたように、地域(大川地区復興協議会)から保存が要望されていた。前者は、保存・解体の是非が会議メンバー内で大きく別れていたことから、そもそもの総論として「遺構の目的・意義・意味」が前段で重点的に意見出しがなされたのに対して、後者では、すでに多くの会議メンバーが保存を望んでいたことから、眼前の各論から意見出しが活発に行われたと考えられる。旧門脇小校舎では、4章2節で述べるように、回を経ることで保存や一部保存へと会議メンバーの意見が変遷していったことから、総論から具体的な各論へと主な意見が推移したと考えられる。大川小旧校舎検討会議の第4回で出た意見の例としては、「(市全体での震災伝承として)、大川小学校の校舎が位置付けられているというものの、震災伝承の中のどういう位置付けかがはっきりしないまま、理念についてもこの間の話し合いでも全然煮詰まらない状況だと思う。(住民)」、「語り継ぐものが決まっていけないのに、遺構を決めるということは、伝承が決まらないうちに遺構と一緒に進めるのは腑に落ちないのです。何を伝えるかが決まっていけないのです。(住民・伝承活動者)」、「今、私たちがここで話し合うのは大川小学校の校舎から、命の防災、伝える、何を残して伝えるか。そういった部分では、やはり校舎をきちんと残して、それを見ることによって、本当に学校では子どもの命を守る。地域では命を考える地域防

災という、いろいろな部分で大切な場所ではないかと、防災ということで私はそう思っております。(住民・伝承活動者)」など、各論の意見出しが成熟してきた中で、そもそもの意義・位置付けに立ち返る意見が増えてきた。保存に概ね合意しているメンバーによる議論においても、「遺構の目的・意義・意味」に関する意見出しは欠かせないものであったことが読み取れる。

表4(旧門脇小学校舎の意見)では第4回で「駐車場の場所とキャパシティ」が17件、表5(大川小旧校舎の意見)では同じく第4回で「管理棟」が16件と多く意見が出された。両方の会議において、第4回の検討会議で当該校舎を含む周辺の地図と、それにこれまで出された意見を踏まえて用途等を示した図面が市からたたき台として提案されたことが大きく影響していると考えられる。前者は、図面が出されたことを受けて、「駐車場をたくさん造ってもらいたいのです。というのは、遠くから来る方は、もちろん車なのですが、地元の人たちが見学に来るのにも、今は車社会なので、みんな車で来るのです。(住民)」、「公園(隣接して整備される石巻市南浜地区復興祈念公園)の駐車場から歩いたら、傾斜も含めて何分ぐらいかかるのか。(住民)」など、駐車場の不足やそこからのアプローチを気にかける意見が多く出たものである。後者は、同様に図面が出されたことを受けて、「場所の件ですが、いいなと思ったのが、交流会館があった場所です。そこが管理棟であったり、地区住民が集まる場所であったり、そういう場所として使うのにちょうど。ガイドをする上でもここに交流会館もあったのだよということ。(住民・伝承活動者)」、「駐車場の所に建物があってもいい。(中略)駐車場の所に、トイレも込みで管理棟があって、最初に説明をそこでさせてもらって、実際に見学通路ではないですけども、「今話したとおり行きます」という形を取ってもいいかもしれないですね。(住民)」など、管理棟の機能や空間配置に関する意見が多く出たものである。これまでに示された意見を地図上に可視化することで、不足する機能や空間配置に関する意見が引き出されたことが分かる。

表5(大川小旧校舎の意見)を見ると、第4回で「中に人を入れるかないか」が多くなっている。大川小では、「存置」という保存方法をとる方針で議論を進めていたこともあり、「私も全部残してもらいたいし、初めて震災後旧校舎に視察のときに入って、2階を見てびっくりしたので、やはり入って見てもらいたいというのがあります。(住民・伝承活動者)」のように、当初は校舎内部に入るかたちでの整備の意見が多かった。他方で、「校舎の内部を見せるためには、内部をかなり整備しないと。建物的には大丈夫だと思うのですが、いろいろな屋根裏とか天井とかは、ある程度整備しないと危険だと思うのです。そうすると、現状が相当変わってしまう。(住民)」、「管理者なり語り部さんなり誰かに付き添ってもらって、入る形を取っていただきたいと思います。(住民)」のように校舎内部を見学する上では、現状のままでは危険であること、かつ安全対策をした場合には、手が加わることで現状の状態を維持できないことを懸念する意見が出された。そういった中で、内部の現状が維持されつつ、見学者の安全を図るという理由で、校舎外部から内部を観察する形式が提案された。また、第5回では、「(大川小周辺で避難に適した場所を)地元の人は分かるのです。(中略)だから、(来訪者に向けて)矢印があっても、もう少しちゃんと書いてあげて。(住民)」、「そうしたら掲示板を何か立てて、避難道はこっちですよ(というのが必要)(住民)」のような「来訪者の津波避難対策」に関する意見も多く出た。「中に人を入れるかないか」と「来訪者の津波避難対策」は、利用者の安全対策に関する意見であるという点で共通している。第4回目を迎えた段階で、利用者の安全に目を向けるようになったと考えられる。

#### (5) 3つの検討会議の意見全体を通して

ここまでに示した3つの検討会議で出された意見の内容分析を踏まえると、その傾向は次のように総括される。

まず、(1)～(3)を踏まえると、回を経るごとに、意見の主な論点(意見が多い内容)はあまり変化せず、それぞれに一貫していたことが分かる。震災伝承検討会議では、震災伝承計画で掲げる基本

理念、伝承の内容(何を伝えるべきか)、震災伝承をサポートする官民連携の中間支援組織、門脇小検討会議では、保存の範囲、特別教室・体育館・校庭の活用、大川小検討会議では、慰霊碑・モニュメントの場所、オープンまでのメンテナンス(防犯・ルール規制)が、全5回を通して議論が集中した内容であった(表3、表4、表5)。

同じ内容について、つづけて意見が出てくるということは、主な論点を成熟させるためには時間と回数が必要であることの流れでもある。これらの意見を言い尽くす十分な回数が提供されたか否かは判断できないが、多くの時間・機会が提供できていたと考えられる。

それと同時に、以上に挙げた議論の内容は、重要な論点であるとも言える。市全体の震災伝承を計画する上では、震災伝承の基本理念、伝承する内容、それを実行・支援する体制(中間支援組織)、震災遺構を計画する上では、保存の範囲というオープン時点の内容のみならず、それまでの維持管理・防犯といった公開以前の時点も主要な関心事になったことが分かる。また、付帯施設等によって遺構本体以外の、震災発生前からある特別教室・体育館・校庭や、震災発生後に設置された慰霊碑・モニュメントも、その検討・計画事項の範疇に含まれる。

門脇小検討会議、大川小検討会議とも共通して「遺構の目的・意義・意味」が一定の議論が集中していた(表4、表5)。震災伝承検討会議においても、組織や取り組み等の具体的な内容よりも、基本理念というコンセプトに議論が集まっていた(表3)。このことは、震災伝承や震災遺構に関する計画を策定するうえ、具体的なプロジェクトや設計を考えるうえで、理念や意義といったコンセプトのレベルにおいて、関係者での合意・納得が必要であったことを示している。

次に、(4)を踏まえると、震災伝承のあり方は議論のきっかけになった災害(ここでは東日本大震災)以前にあった地域の課題を考慮すること、遺構に対して賛成総意・反対の如何を問わず、遺構の目的・意義・意味の議論は欠かせないこと、遺構が損傷を受けた建物であることから、来訪者

の安全対策も大きな関心事であることが分かる。

図6に、表3～表5をもとに、3会議の第1回～第5回の意見の数の推移を示す。第1回は、いずれの会議も意見の数は多くなかったものの、第2回目以降からは、それよりも多くの意見が出されていることが分かる。いずれの検討会議でも、最終回となった第5回の検討会議での意見数が最も多い。第1回・第2回を除いて、会議メンバーが活発に意見を出すブレインストーミングの機能が果たしていることが分かる(表3～5より、第1回・第2回は「検討会議そのものに関する確認」が多い)。前述したように、各検討会議においてアジェンダを提示したわけではないが、表3～表5および図6を見て分かるように、多くの意見が多方面に渡って出されている。一方で、メンバーの関心が薄い内容については意見出しを十分に行えていないことは否定できない。例えば、表3を見ると、第1回と第2回で比較的広く話題が言及されており、第3回以降にそれらに対して順番に議論していく進行形式も考えられる。参加メンバーの関心に寄り添うことと、関心が低い内容について意見を引き出すことのバランスについては今後の課題となっている。

#### 4.2 遺構の保存・解体等に対する考え方の変化

3章2節の2)で述べた分析を行った結果を表6に示す。表の縦方向には、会議メンバーとその区分(立場)を、横方向は各回とし、セル内に、各会議メンバーが、門脇小学校校舎に対して望ん

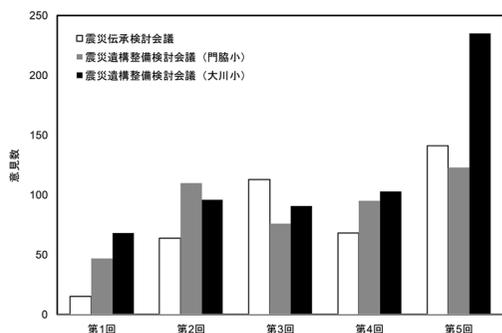


図6 3つの検討会議における会議の意見数の推移

表6 震災遺構(旧門脇小学校校舎) 整備検討会議メンバーによる遺構の保存・解体等に対する考え方の変遷

No.	区分	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
1	住民	解体/移設	部分保存	部分保存	部分保存	部分保存
2	住民	解体	部分保存	部分保存	部分保存	部分保存
3	住民	解体	部分保存	部分保存	部分保存	部分保存
4	住民	解体	全体保存/部分保存	全体保存/部分保存	部分保存	部分保存
5	住民	解体	部分保存	部分保存	部分保存	部分保存
6	住民	解体	解体/移設	解体/移設	解体/移設	解体/移設
7	住民	解体	全体保存/部分保存	全体保存/部分保存	全体保存/部分保存	全体保存/部分保存
8	住民	部分保存	部分保存	部分保存	部分保存	部分保存
9	伝承活動者	部分保存/移設	全体保存/部分保存	全体保存	全体保存	全体保存/部分保存
10	伝承活動者	全体保存	全体保存	全体保存	全体保存	全体保存
11	伝承活動者	全体保存	全体保存	全体保存/部分保存	全体保存/部分保存	全体保存
12	伝承活動者	全体保存	全体保存	部分保存	全体保存/部分保存	全体保存/部分保存
13	伝承活動者	移設	移設	部分保存	全体保存	部分保存
14	伝承活動者	全体保存	全体保存	全体保存	全体保存	部分保存
15	有識者	全体保存	全体保存	全体保存/部分保存	全体保存/部分保存	全体保存/部分保存

でいる考え方を「解体」「全体保存」「部分保存」「移設」として示している。実際には、各回で「全体もしくは部分の保存」のように同時に2つに考えを述べている場合があったことから、両方を併記している箇所もある(例:「全体保存/部分保存」)。また、校舎の残し方への考え方が明示的に述べられていない回は、それよりも前の考え方と同じものを表示している。なお、ファシリテーターは意見を述べていないため、表には掲載していない。

第1回に着目してみると、「解体」が6名、「全体保存」が5名、「部分保存」が1名、「移設」が1名、「解体/移設」が1名、「部分保存/移設」が1名となっており、「解体」「解体/移設」「移設」「部分保存/移設」を合わせると9名となり、半数を超えている。また、住民は8名のうち7名は、「解体」「解体/移設」を希望しており、地域住民にとって校舎の遺構としての保存は、当初望まれていないことが分かる。

一方で、第2回以降からは、「解体」を希望していた住民の考えが「全体保存」や「部分保存」に大きく変化する。その背景には、第1回と第2回の検討会議の間にあった視察が影響していると考えられる(表2参照)。以下、遺構の保存・解体に関する意見が変わった参加メンバーの発言の例を見てみる。「視察を通して、(門脇小の)校舎内部を残す大切さを学んだ。(No.1, 住民, 解体/移設→

部分保存)」「広島等の視察に参加させていただいて、いろいろ見せていただいて【中略】それを見たときにやはり残してよかったのだなと思いました。(No.3, 住民, 解体→部分保存)」「最初は解体希望だったが、門小の中に初めて入り、あんなにすごいものはあの場所で後世に残さなければいけないと思った(No.7, 住民, 解体→全体保存/部分保存)。「解体」を望んでいた住民の多くは、校舎の内部を見たことがなかった。今回の視察で始めて内部を見ることで、そのインパクト・重要性を体感したことで保存への意向が高まった。さらに、広島における「街の中にある遺構」の実例を見ることで、イメージが湧いたことと、実物でしか伝えることができないことがあることを実感して、考え方が変わったと考えられる。

#### 4.3 会議メンバーによる検討会議に対する評価

3章2節の3)で述べた分析を行った結果を図7に示す。図中では、それぞれのふりかえりにもとづく結果を、好意的、いずれでもない、否定的に区分している。なお、ここに示したものは当日の出席者分のみとなる。

図7を見ると、いずれの検討会議においても、好意的な評価をした会議メンバーが多いことが分かる。以下に、3つのそれぞれの評価結果の具体的な発言の例を挙げる。発言の例中の下線は、以

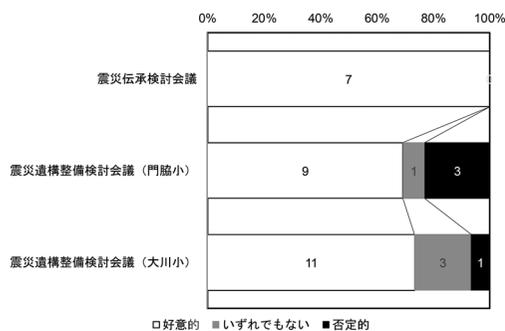


図7 会議メンバーのふりかえりにもとづく検討会議全体・策定された計画に対する評価

下の考察に関連する箇所である。

- 1) 好意的：官民が連携して、様々な異なる考え方、アイデアがあったものの、それぞれの折り合いをつけて、一つのかたちにまとめたことが好意的な評価が得られた
  - ・「いろいろな方の意見があるので、一人一人が100%満足だというのはないと思いますが、本当にここまでまとめてくださったことに感謝申し上げます。1人ではできないこと、個々の団体ではできないこと、行政だけでもできないこと、それをみんなで力を合わせて協力し合いながら、とにかく経験していない次の世代が犠牲を1人も出さないというところが、このまとめあげた計画の一番大切なところだと思う。(震災伝承検討会議／伝承活動者)」
  - ・「まずこの伝承計画ができたこと、本当に良かったことだと思います。ありがとうございます。やはりこの伝承計画で、やはり官民でやっていくとか、そもそも伝承計画をこうやって私たちのような意見を聞いていただきながらやるということそのものがすごく良かったと思うのです。(震災伝承検討会議／伝承活動者)」
  - ・「今までずっと検討会議に参加させていただいて、ありがたいなと思います。正直なところ、まだ私も、完全にそれに賛成しているわけではないのですが、ただ、最終的

な方針としてこのようになったということであれば、これを後世に残すために、有意義に活用していただきたい。(門脇小検討会議／住民)」

- ・「1年間、どうもありがとうございました。一人一人の考えはあるのですけれども、ある程度、妥協点を見つけて、事業スケジュールを進めていただきたいと思います。ありがとうございました。(大川小検討会議／住民)」
  - ・「本当に皆さまの意見がいろいろ出まして、【中略】基本的な考え方がここに大きくまとめられたということが、とにかく良かったのではないかと考えております。(大川小検討会議／伝承活動者)」
- 2) いずれでもない：策定された計画に対して、次のステップへの期待や懸念を述べている感想があった。
    - ・「アウトラインはできたと思いますので、工事が始まる前に、このようになりますよという看板の一つ立てていただくと、そのところをお願いしたいと思います。(門脇小検討会議／住民)」
    - ・「このまま、この計画のとおりので用地獲得ができるのか心配です(大川小検討会議、住民)」
  - 3) 否定的：1)と密接に関係するが、計画に反映されなかった意見、アイデアも存在する。これらを述べた会議メンバーは、当然のことながら否定的な評価を述べている。
    - ・「皆さま、ご苦勞さまでした。正直言って、この5回はなかなか思いが伝わらない会議だったなと思います。(門脇小検討会議／住民)」
    - ・「これだけのものを決めるのに、随分時間がかかったものだと思います。(門脇小学校検討会議、住民)」
    - ・「だいたい私として、この件に関しましては、納得いかないことが多々あるのですが。(大川小検討会議／住民)」
- 会議メンバーの全員から良い評価がなされな

かったものの、多くの会議メンバーから好意的な評価が得られたことから、3つの検討会議は、会議メンバーの意見を収集する機能として、一定の役割が果たせたと捉えることができる。特に、好意的な評価を述べた会議メンバーにおいては、策定された計画に対して、満足や完全な賛成ではなく、納得が得られたことが重要である。今回の3つの検討会議は、「協調学習 (Collaborative learning)」<sup>25,26)</sup>の過程であったと捉えることができる。「協調学習」とは、「意見の不一致」や「理解の差」に気づきつつ、お互いの理解を深化させていくプロセスである。以上の好意的な評価に見られる感想・ふりかえりは、会議メンバーが相互に意見を述べ合うことで、「意見の不一致」や「理解の差」の存在を認識していたことを示している。このような状況は、最終的な結論・決定を得ようと「議論」することや意思決定を下したりすることが目的ではなく、自由なムードの中での真剣な話し合いを行う「対話」<sup>27)</sup>の形式で会議が進行したことが効果的であったことを示している

#### 4.4 検討会議の実践を踏まえての会議方式の変化

3章2節(4)で述べた分析にもとづき、すべての会議を通して、当初の会議方式と変わった点を以下に挙げる。

- 1) 事後発言ペーパーの導入：各会議は、2時間という時間制限の中で行われた。会議の中で、意見やアイデアが思いついたものの、時間範囲の中で発言することができなかった場合には、事後意見として、ペーパーに記入して提出してもらう制度が設けられた。これらお意見・アイデアは、議事録に反映し、次回の検討会議で確認することとなった。これは、それぞれの第1回の検討会議で、「発言しきれなかった」というメンバーの声を受けて、ファシリテーターから提案し、第1回目以降から採用された方法である。
- 2) 会議冒頭における前回来議のふりかえりの強化：会議メンバーが多様であるため、全員のメンバーが毎回出席できるわけではない。ま

た、隔月で開催されたことから、前回の検討会議の内容が必ずしも記憶として鮮明でないことが懸念された。そこで、会議冒頭に前回来議までの会議で出された内容を改めて丹念にふりかえる時間を設けることで、当該の会議に参加するメンバーの状況認識の統一が図られた。また、このふりかえりにおいては、前々回来議までの内容に加えて、前回加わった内容を差分として、明示かして確認することも行われた。これは、第1回目の会議を欠席し、第2回から出席したメンバーがおり、メンバー間で情報・認識に不一致が発生したことから、会議の進行に支障をきたした場面があったことから、それぞれの第3回来議以降に徹底した行われるようになった。

これ以外については、開始当初に設計し方式とは変わらず、全5回が進行していった。

#### 5. おわりに

本稿では、東日本大震災で被災した石巻市において実施された市民参画で行われた震災伝承や震災遺構に関する検討会議を対象にして、参与観察と出された意見の内容分析を行った。その結果は次のようにまとめられる：

- 1) 出された意見の内容：3つの検討会議とも、主な論点は、大きく変化することなく、震災伝承検討会議では基本理念、伝承の内容、中間支援組織、門脇小検討会議では保存の範囲、特別教室・体育館・校庭の活用、大川小検討会議では慰霊碑・モニュメントの場所、オープンまでのメンテナンスと、全5回ではほぼ一貫していた。これは、一つの論点・内容について、長い時間をかけて意見を述べ合うニーズが高いことを示している。また、いずれの会議体においても、基本理念や意義などのコンセプトに対する意見が主要な論点となった。
- 2) 遺構の保存・解体等に対する考え方の変化：門脇小検討会議においては、校舎の解体を望む住民が会議を経ることで、保存の意向へと変化していった。これには、当該の校舎の内

部を視察したり、広島等の先行事例を視察したことが大きく影響していた。

- 3) 会議メンバーによる検討会議に対する評価：検討会議全体や策定された計画に対して、会議メンバーの多くは好意的な評価であった。これは、対話の形式を重視し、相互の意見の不一致等を学び合う協調学習のプロセスによって、それぞれの計画ができあがったことに、会議メンバーによる一定の納得が得られたものと考えられる。
- 4) 検討会議の実践を踏まえての会議方式の変化：限られた時間の中で、より多くの意見を収集するために事後意見ペーパーが設けられたことと、それぞれの回の会議を開始する上で、メンバー全員の状況認識を統一するふりかえりを丁寧に行うことが加わった。

以上を踏まえると、多様な立場が参画する震災伝承・震災遺構に関連する検討会議を実施する場合において、可能な限り回数を多く設けること(上記1)にもとづく)、遺構の保存・解体に関する意見を集約する上では、先行する事例を目視・視察することが必須であること(上記2)にもとづく)、相互の意見の不一致を理解し合う協調学習の形式が適していること(上記3)にもとづく)、市民の参加が多く、すべての会合に出席できない人がいる場合には、会合の事前・事後の状況認識の統一(情報格差の是正)が効果的であること(上記4)にもとづく)が、今後の設計において配慮すべき点であることが明らかになった。

以上ここまでの結果を踏まえて、以後、震災伝承や震災遺構に関して類似する会議体を行う上で、重要になるポイントは、以下のように整理することができる。以下のポイントのそれぞれの末尾のかっこの中には、上記で明らかになったことのかたかっこ番号を付しており、本論の分析との関連性を示している。

- ・ステークホルダー(会議の参加メンバー)から、相互の異なる意見をなるべく多く収集すると同時に、対話<sup>21)</sup>の形式を重視して、メンバーが相互に互いを学び、理解し合う場として設定する(上記3)の結果を踏まえて)。

- ・自地域が置かれている状況(今回の場合は、市内の震災遺構や、そこで行われている語り部活動)と先行事例(今回の場合は、広島、神戸、中越)を視察・体験することで、その意義・重要性を学んだり、当該の対象(ここでは、石巻市全体、門脇小校舎、大川小校舎)の他者にはない特異性を見出す機会を設ける(上記2)の結果を踏まえて)。
- ・意見を出し合う機会は単発ではなく、同じ内容・テーマに対しても、なるべく多く発言する場(回数)を用意して時間をかける(上記1)の結果を踏まえて)。
- ・会議の冒頭、会議中など、参加しているメンバーが同じ情報を共有し、状況認識の統一を図る(上記4)の結果を踏まえて)。

また、特に4章では主要な論点や特徴的な論点が見出された。以下は、今後の類似する検討会議においても配慮すべき重要な論点として列挙する。

- ・震災伝承の検討について
  - ▶最も基本的な論点として、行政圏全体の震災伝承の基本理念、伝承する内容、それを実行・支援する体制(中間支援組織)が挙げられる。
  - ▶震災伝承計画を策定するきっかけになった災害(本事例では東日本大震災)以前にあった地域の課題(災害への備え)についても議論することで、災害前の課題に照らして今後の震災伝承のあり方の方向性が見えてくる。
- ・震災遺構の検討について
  - ▶震災遺構を計画する上では、保存の範囲等のオープン時点の内容のみならず、それまでの維持管理・防犯といった公開以前の時点も重要な検討事項になる。
  - ▶震災発生前からある特別教室・体育館・校庭や、震災発生後に設置された慰霊碑・モニュメントも、その検討・計画事項の範疇に含まれ、「遺構関連環境」の一部として考慮する必要がある。
  - ▶震災遺構の目的・意義・意味の議論りは欠かせない。検討会議の前半で無理に合意することはせずに、検討の過程のおりおりにて、こ

れに関する意見を絶えず交わしながら、収斂することが重要である。

検討会議の実践を通して、震災伝承・震災遺構を検討する会議の設計手法に関して得た知見においては、震災伝承や遺構に関わらず、一般的な会議・検討方法で求められる要件と大きく異ならないと考える。一方で、一連の検討会議が遂行されたことを踏まえ、今回の事例で採用した手法の組み合わせは、今後の援用に耐え得る可能性を示している。また、前記の配慮すべき重要な論点は、事例分析ではあるものの、震災伝承や震災遺構を検討する上で集中的な議論になることが予想され、これに関連するアイデアを準備やとりまとめの段階で充実させる必要があろう。

ここで策定された計画については、次は様々なかたちで実行する段階を迎えている。今後は策定された計画が、どのように使われ、地域の活動や事業に反映されていくのかをモニタリングすることで、同計画の効果を検証していきたい。

## 補注

- (1) 「望ましい合意形成プロセスの要件」<sup>12)</sup>は、1) プロセスに参加するべき参加者、2) 与えられるべき情報、3) プロセスの進め方を規定している。それぞれ1)は、ステークホルダーがもれなく当事者として参加できるようにすること、または無作為抽出された市民が参加できる仕組みにすること、2)は解決すべき社会的課題の内容の情報、関連する技術的情報、関係者の利害の状況に関する情報、関係法庁省などの制度的情報、費用や便益に関する経済的情報、反作用可能性に関する情報、副作用可能性に関する情報、3)は透明性の確保、時間と費用の妥当性、議論の手続きルールの明確化、議論の結の関係者による尊重である。
- (2) 「社会的合意形成の進行」<sup>13)</sup>は、次の17項目からなる、合意形成の進行はファシリテーターが行う、ファシリテーターは話し合いの参加者が話し合いの目標を共有できるように工夫する、ファシリテーターは話し合いの会

場全体に配慮し、発言者の意見を参加者全員が理解できるようにする、ファシリテーターは参加者の意見とともに意見の理由についての情報の共有を進める、ファシリテーターは問題をインタレストによって再定義する、ファシリテーターチームはファシリテーター・サブファシリテーター・記録係で構成する、ファシリテーターは話し合いの参加者すべてに敬意をもつ、ファシリテーターは創造的な話し合いを心がける、ファシリテーターは意見を批判に・陳情から提案へと変換する、ファシリテーターはつねに建設的な語り返しをこころがける、ファシリテーターはワークショップの道具を上手に用いる、ファシリテーターは自分の表情をつねに意識する、ファシリテーターは自分の語り口にも気をつける、ファシリテーターは話し合いの内容を記録しやすいように進行する、ファシリテーターはラウドスピーカーを上手に抑制する、ファシリテーターはタテマエを尊重する、ファシリテーターは中立公正でなければならない。

- (3) ここで述べた計画の内容は、2017年7月時点のものである。その後、2018年7月時点の基本設計策定のフェーズにおいては、各種の内容が変更になっているものがある。変更内容やその原因については、今後、追加調査・分析を行いたい。

## 謝辞

本研究は、日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業・実社会対応プログラム「効果的・持続的な災害伝承を目的にした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」(研究代表者：佐藤翔輔)の助成によるものである。各面において、石巻市復興政策課、石巻市震災伝承推進室、株式会社ドーコン、公益社団法人みらいサポート石巻から多大なる協力を得た。また、資料の整理等においては、東北大学災害科学国際研究所技術補佐員の平塚理香氏、森實香純氏、後藤さつき氏からのサポートを得た。

## 参考文献

- 1) 佐藤翔輔・中川政治・浅利満理子・今村文彦：災害伝承活動に関する先進事例からの学びと石巻地方における課題－「震災学習協働事業体制づくり」コンファレンスの取組み－，地域安全学会東日本大震災特別論文集，No. 5，pp. 15-18，2016.8.
- 2) 浅利満理子・中川政治・佐藤翔輔：宮城県における震災学習プログラムに関する現状分析－東日本大震災と津波災害から6年間の震災伝承の特徴－，地域安全学会論文集，No.31，pp. 77-85，2017.11.
- 3) 佐藤翔輔：「災害を伝える」活動の最新動向－「災害かたりつき研究塾」の合宿活動をもとにして－，口承文芸研究，No. 38，pp.42-51，2015.3.
- 4) 石巻市：震災伝承検討会議の役割・スケジュール等，第1回震災伝承検討会議資料，2016.7. <http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10051100/9003/20170608155535.html>
- 5) 石巻市：震災遺構検討会議の役割・スケジュール等，第1回震災遺構検討会議（旧門脇小学校校舎）資料，2016.7. <http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10051100/9004/20170608180312.html>
- 6) 石巻市：震災遺構検討会議の役割・スケジュール等，第1回震災遺構検討会議（大川小学校旧校舎）資料，2016.7. <http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10051100/9005/20170608181730.html>
- 7) 高橋和雄・木村拓郎・西村寛史・藤井 真：雲仙普賢岳の火砕流で被災した大野木場小学校被災後者保存構想の策定に関する調査，土木学会論文集，No. 612，I-46，pp. 359-371，1999.1.
- 8) 筑波匡介・澤田雅浩：中越地震における震災遺構の成立課程 その1：中越メモリアル回廊 妙見メモリアルパークについて，日本建築学会学術講演梗概集2013（都市計画），pp. 1111-1112，2013.8.
- 9) 佐藤翔輔・今村文彦：東日本大震災の被災地における震災遺構の保存・解体の議論に関する分析－震災発生から5年の新聞記事データを用いて－，日本災害復興学会論文集，No. 9，pp. 11-19，2016.7.
- 10) 安部夏海・安武敦子：災害遺構の保全プロセスと評価を踏まえた公開手法の検証，長崎大学大学院工学研究科研究報告，Vol. 47，No. 88，pp. 78-82，2017.1.
- 11) 石巻市：震災伝承及び震災遺構に関するこれま
- での動きと各会議の関係，第1回震災伝承検討会議資料，2016.7.
- 12) 石巻市：石巻市震災伝承検討委員会（平成25年11月から平成26年12月），<http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10051100/0080/20140811091301.html>
- 13) 石巻市：石巻市震災遺構調整会議（平成27年6月から平成27年12月），<http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10051100/9001/20160113092649.html>
- 14) 倉阪秀史：政策合意形成入門，勁草書房，pp.148-162，2012.10.
- 15) 桑子敏雄：社会的合意形成のプロジェクトマネジメント，pp. 117-127，2016.2.
- 16) 石巻市：石巻市震災伝承計画，10 pp.2017.6.
- 17) 石巻市震災遺構整備方針（旧門脇小学校校舎），2017.6.
- 18) 石巻市震災遺構整備方針（大川小学校旧校舎），2017.6.
- 19) NHK仙台放送局：石巻市が震災伝承の部署（2017年3月28日放送）
- 20) 新潟県中越大震災復興検証調査会：第15節 震災メモリアルと総合的教育研究の推進，新潟県中越大震災と復興検証，2015.3.
- 21) 気象庁仙台管区气象台：2016年11月22日05時59分頃の福島県沖の地震について，[http://www.jmanet.go.jp/sendai/kouhou/houdou/16/20161122\\_fukusimaoki\\_02.pdf](http://www.jmanet.go.jp/sendai/kouhou/houdou/16/20161122_fukusimaoki_02.pdf)
- 22) 石巻市，東北大学災害科学国際研究所，株式会社サーベイリサーチセンター：2016年11月22日福島県沖地震津波避難行動に関するアンケート（プレスリリース），[https://www.tohoku.ac.jp/japanese/newimg/pressimg/tohokuunivpress20170306\\_01web.pdf](https://www.tohoku.ac.jp/japanese/newimg/pressimg/tohokuunivpress20170306_01web.pdf)
- 23) Anawat Suppasri, Natt Leelawat, Panon Latcharote, Volker Roerber, Kei Yamashita, Akihiro Hayashi, Hiroyuki Ohira, Kentaro Fukui, Akifumi Hisamatsu, David Nguyen, Fumihiko Imamura: The 2016 Fukushima earthquake and tsunami: Local tsunami behavior and recommendations for tsunami disaster risk reduction, International Journal of Disaster Risk Reduction, Vol. 21, pp. 323-330, <http://dx.doi.org/10.1016/j.ijdrr.2016.12.016>, 2016
- 24) 佐藤翔輔・今村文彦・相澤和宏・横山健太・佐藤勝治・岩崎雅宏・皆川満洋・戸川直希：宮城県石巻市における2016年11月22日福島県沖の地

- 震津波による避難行動実態, 土木学会論文集 B2 (海岸工学), Vol.73, I\_1603-I\_1608, 2017.10.
- 25) Miyake, N.: Constructive interaction and the iterative process of understanding, *Cognitive Science*, Vol.10, 1986.
- 26) Shirouzu, H., Miyake, N., Masukawa, H.: Cognitively active externalization for situated reflection, *Cognitive Science*, Vol. 26, 2002.
- 27) 中原 淳・長岡 健: ダイアローグ対話する組織, 224pp., ダイヤモンド社, 2009.
- (投稿受理:平成30年4月6日  
訂正稿受理:平成30年7月4日)

## 要 旨

本稿では、東日本大震災で被災した石巻市において市民参画で行われた、震災伝承の基本計画や震災遺構の整備方針に関する検討会議を対象にして、そこに出された意見の分析を行った。その結果は次のようにまとめられる。1) 3つの検討会議とも、主な論点は、経時的に大きく変化することなく、震災伝承検討会議では基本理念、伝承の内容、中間支援組織、門脇小検討会議では保存の範囲、特別教室・体育館・校庭の活用、大川小検討会議では慰霊碑・モニュメントの場所、オープンまでのメンテナンスと、全5回ではほぼ一貫していた。2) 門脇小検討会議においては、校舎の解体を望む住民が会議を経ることで、保存の意向へと変化していった。これには、当該の校舎の内部を視察したり、広島等の先行事例を視察したことが大きく影響していた。3) 検討会議全体や策定された計画に対して、会議メンバーの多くは好意的な評価であった。これは、対話の形式を重視し、相互の意見の不一致等を学び合う協調学習のプロセスによって、それぞれの計画ができあがったことに、会議メンバーによる一定の納得が得られたものと考えられる。